「なになにであるか」

「老人と病人と死人と出家者であります」

王は、

「これからは、こういうものがわしの息子の側に近づくのを許してはならぬ。わしの息子は仏となる必要はない。わしは、わしの息子が二千の属島に囲まれた四つの大きな国土（四大洲）の支配権をもって統治し、三十六ヨージャナの円陣をなしている群衆に囲まれて、天空を進んで行くのを見たいものだ」と、このようにいって、これら四種類の人間が王子の視界に入るのを防ぐために、四方にそれぞれ一ガーヴタにわたって見張りを置いた。』(*ibid.* p. 57)

後嗣の子が生まれたばかりのときに、こんな論議がなされるはずはない。これは後世につくられた伝説である。ゴータマ・ブッダが人間の生・老・病・死を見て出家した事実と、父なる王が自分の長子の出家に反対したという事実が、ゴータマ・ブッダの生まれたばかりの時期に投影されているのである。

（1）「目的を達する」というときに、arthaḥ sidhyati というのは、ごく普通の表現である。

第二章　若き日[1]

一　宮廷における生活

(一)　幼かりし日

ゴータマ・ブッダの幼時のことは、誇張が少なくて比較的に古い伝説を伝えていると思われる仏伝[2]のうちには、ほとんど説かれていない。総じて四ニカーヤおよびパーリ文『律蔵』には出家前の釈尊についてはほとんどなにも記していない。若き王子をいろどる華やかな種々の物語は後代の発達し増広された仏伝のうちに詳しく出てくるのである。

ゴータマ・ブッダ誕生ののち七日で母マーヤー夫人は亡くなり[3]、そののちは母の妹であるマハーパ

ジャーパティー（Mahāpajāpati, 大愛道）に養育されたということが、のちの仏伝に伝えられている。[4]〔この場合の「マハー」は敬称ではなくて、名に属していたものではないかと思われる。[5]〕つまりスッドーダナ王はマハーパジャーパティーを後妻に迎えたのである。妻の没後に妻の妹を後妻に迎えるということは世間にもよくあるし、またこの事実がことさらにゴータマ・ブッダの神格化に寄与するものでもないから、やはり歴史的事実が伝えられているのであろう。

このマハーパジャーパティーには、のちにナンダ（Nanda）という男子が生まれたという。ゴータマ・ブッダにとっては異母弟にあたるわけである。彼女はのちに出家して、仏教教団における最初の尼僧となった。これらのことはごく古い経典には説かれていないが、非常に特徴的な事実であるし、また諸書の伝えに矛盾もないから、おそらく事実であったのであろう。マハーパジャーパティーはゴータマ・ブッダの入滅に遇うのに忍びず、ゴータマ・ブッダよりも前に亡くなったといわれている。[6]〔異母弟はナンダ一人だけであったらしい。従兄弟としては、デーヴァダッタ、アーナンダ、アヌルッダ、マハーナーマなどが伝えられているが、いずれも従弟であったと考えられる。ともかくインドでは従兄と従弟とを語としては区別しない。〕

父なる王が、従臣の武士たちの信望を受けていたために、長子であるシッダッタも大切にされたということを証する伝説が、「ジャータカ序」のうちに述べられている。

『ところで、その日、祝宴の場に八万人の親族が集まったが、それぞれ一名ずつの男子を〔さし出すことを〕約束し、

「このかたが仏となられるのであれ、王となられるのであれ、わたしたちはそれぞれ一名ずつの男子をさし出しましょう。もし仏となられるのならば、もっぱら王族出身の修行者らに尊敬され、取り囲まれて活動することになりましょう。またもし王になられるのならば、もっぱら王族出身の子らに尊敬され、取り囲まれて活動することになりましょう」といった。』（*Jātaka*, vol. I, p. 57）

ここにはたぶんに後代の潤色が見られるが、シッダッタ太子が宮廷で重んじられ、大切にされていたということは事実であろう。

乳母がかれを大切に育てたという伝説があるが、これは確かに歴史的事実であろう。

『王は、ボーディサッタに、最高の容姿をそなえ、欠点がまったくない乳母たちをつけた。ボーディサッタは無数の従者を従え、大いなる栄光をになって成長された。』（*ibid.*）

たぶんに宮殿の豪華な生活を思わせる一節があるが、それはもちろん誇張であろう。

『日中のあいだは、そこで遊び、吉祥な蓮池で沐浴し、日が没してから、身に飾りつけをしてもらおうとめでたい石の台にすわられた。すると、かれの召使いたちが、さまざまな色彩の衣服、さまざまな種類の装飾品や、花環、薫香、塗香をもって、四方から取り囲んで立った。その瞬間に、サッカ（帝釈天）のすわっている座が熱くなった。

かれは、

「いったい、だれがわたしをこの場から追い出そうとしているのか」と考えあぐんでいるうちに、ボーディサッタ（＝釈尊）の飾りつけの時刻であることを知り、ヴィッサカンマ（工芸神）に向か

って、

「きみ、ヴィッサカンマよ、シッダッタ王子が今日の真夜中に、世俗からの大いなる離脱をされるであろう。いまその最後の飾りつけがなされるのであるから、園遊地へ行って、この〈偉大な人〉を天上の装飾でお飾り申しあげよ」といった。かれは、

「かしこまりました」と答え、神々の威力によって一瞬のうちに〔そこに〕近づき、かの〔ボーディサッタ〕の理容師を装い、〔他の〕理容師の手から頭冠の布を受け取ってボーディサッタの頭に巻きつけた。ボーディサッタは手が触れただけで、

「これは人間ではない。ひとりの天子である」と察知された。布を一回巻くだけで、頭の冠のうえに宝珠のような形をとって、千枚の布が載った。つぎに巻くときにも千枚の布というぐあいで、十回巻いて一万枚の布が載った。小さな頭に多くの布がどうして載るのか、と考えてはならない。そのなかで、一番大きなものがサーマつる草の花ぐらいあり、その他はクトゥンバカの花ほどであった。ボーディサッタの頭は、おしべを一面に広げたクッヤカの花のようであった。

さて、かれはすっかり装飾で飾りつけをされ、楽師たちがみな各自の技量を示し、バラモンたちが「勝利」とか「歓喜」などということばを発し、吟遊詩人や香売りなどが種々な祝賀のことばや賞讃のことばを発して敬意を表しているなかを、完全に儀装をほどこしたりっぱな車に乗られた。』(*ibid.* pp. 59-60)

シャカ族の生活の実態は農民であった。王の廷臣といえども農耕に従事していた。そのことは、シ

ッダッタ誕生後にまもなく行なわれた次の「種まき祭」の伝説が伝えている。

『さて、ある日のこと、王は種まき祭というものを催した。その日、都全体を〔人々は〕神々の宮殿(devavimāna)のように飾りつけた。下僕・傭人など(dāsakammakaradayo)全員が新しい衣服を着け、香や花環などで着飾って、王家に参集した。王の耕作地では、一千梃の鋤が〔曳き牛に〕つながれてあった。その日、百七梃が曳き牛や手綱や紐ともども、銀で飾られてあったが、王が手にする鋤はきらめく黄金の装飾がほどこされてあり、曳き牛の角や手綱や鞭も黄金で飾られていた。王は大勢の従者とともに出立し、息子(=釈尊)も連れて行った。耕作地に一本のジャンブ樹があり、葉を茂らせ濃い影をおとしていた。そのしたに王子の臥床を設け、うえには黄金の星型をちりばめた覆いをつけ、幕をめぐらせ、見張りを置いてから、王はすっかり飾りをつけて廷臣たちを従え、鋤入れの場所へとおもむいた。そこで、王は黄金の鋤を取り、廷臣たちは百七梃の銀の鋤を、農夫たちはそれ以外の鋤を手にした。一同はそれらを手にして、ここかしこと耕した。王は手前から向こうへ、向こうから手前へと行きつ戻りつしていたが、その場所で大きな幸せを感じていた。』(*ibid.* pp. 57-58)

後世には、太子の幼時の宮詣りの浮彫図[7]がつくられたが、農耕社会であるならば、当然こういうことも行なわれたであろう。お宮(インド一般では devakulālaya)にお詣りに出かけたことは、諸仏伝の認めるところである(前掲「ジャータカ序」では devavimāna となっている)。

ゴータマ・ブッダは当時の王族の教養として必要な、あらゆる学問・技芸を習ったが、非凡の才を

発揮したということが、やはり後代の仏伝のうちに記されている。[8] 若干の仏典によると、七歳のときから書籍を学ぶことを始めたという。[9] これもおそらく事実であったのであろう。ただ個々の伝説は後代の仏典では非常に誇張して語られている。

では、学問は、どのようにして習得したのであろうか？　かれは「文の学校」(lipiśālā) へ連れて行かれて、ヴィシヴァーミトラ (Viśvāmitra) という師 (ācārya) から教えられたという。[10]『修行本起経』(上) では、太子はその僕五百人とともに、師の門に詣り、教えを受けたことになっている。[11] ところが『過去現在因果経』では、太子のために大学堂を起こし、跋陀羅尼 (Bhaddalāni ?) というバラモンをこさせて教えさせたということになっている。[12] 太子の威厳がますます巨大化されたのである。後世における変化である。太子が学校へ習いに行ったことを表現する彫刻が、後世にはいくつもつくられている。[13]

それを見ていると、当時の学校の実情が解るのもおもしろい。釈尊は幼時に学校へ行って、学友とともに板を膝の上にのせて授業を受けたらしい。[14] ヴェーダの学問は聖典を暗誦するのであるから、板のようなものを必要としない。ところが釈尊が幼時に受けた学問は〈実学〉であり、文字に書いたのである。バラモンたちのヴェーダの学問とは全然異なったものを学んでいたと考えられる。

またゴータマ・ブッダが教師を自分の宮殿に呼びつけて講義を聞いたのではなくて、学校へ出かけて行ったのだ、と古代インド人が考えていたことはおもしろい。ここでは、ゴータマ・ブッダはまだ神格化されていないから、こちらのほうが歴史的事実を伝えているのであろう。

後代の仏伝になると、かれが俊才であったことをたたえるようになる。アシヴァゴーシャは讃歌する。

『ついで東の山に出る旭日のように、風に煽られた焔のように、太子は次第に健やかに生い立った。闇のない十五夜の月のように。』(*Buddhacarita* II, 20)

『幼年を過ぎると、適時に終了の儀式を正しくすませ、自分の家柄にふさわしい、もろもろの学芸を、〔普通の人なら〕多年を要するのに、わずかの日数で習得した。』(*ibid.* II, 24)

別の仏伝によると、太子は何でも知っているので、師は『希有清浄なる智慧の人にして、善く諸の世間の法に順じ、自らすでに一切の論に該通す。また更に来って我が学堂に入るとは！』といって感嘆した。[15]

(1) 釈尊の「若き日」に関して、本邦では諸種の漢訳仏伝（本書五―六ページ）、西洋では『ジャータカ』(vol. I, p. 54 f. 邦訳『南伝大蔵経』第二八巻、一一九―一二八ページ。諸種のジャータカ訳のほかに Henry Clarke Warren : *Buddhism in Translation*, pp. 48–56) によって述べる場合が多い。そのほかになお参照すべき資料としては、*Saṅghabhedavastu*, Part I, pp. 57–61 ; *Lalitavistara* (ed. Lefmann) VIII, f.『有部律破僧事』第三巻（大正蔵、二四巻、一一〇ページ中―一一一ページ下）、『過去現在因果経』第一巻（大正蔵、三巻、六二七ページ下―六二八ページ上）、『仏本行集経』第一一巻、習学技芸品第十一（大正蔵、三巻、七〇三ページ中―七〇五ページ中）、『方広大荘厳経』第四巻、示書品第十（大正蔵、三巻、五五九ページ上―五六〇ページ中）、『普曜経』第三巻、現書品第七（大正蔵、三巻、四九八ページ上―四九九ページ上）。

(2)『仏所行讃』や「ニダーナ・カター」など。